

# 子ども抑うつ

## コロナの影響調査

### 依然高止まり

子どもの抑うつ傾向が新型コロナウイルス流行初期から改善せず、高止まりしていることが国立成育医療研究センター（東京都世田谷区）の調査で分かりました。中等度以上だったのは1割超に上り、専門家は「周囲のおとなは、子ども

の体調や性格の変化を迅速さないでほしい」と訴えています。新型コロナウイルス感染者は20

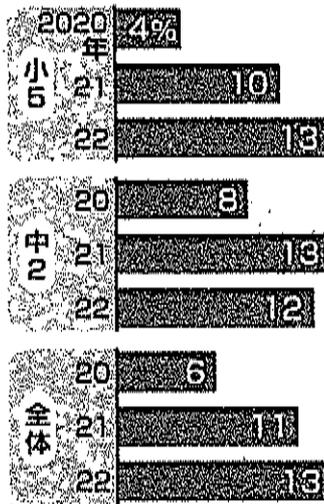
20年1月に初確認され、同センターは20年12月、21年12月、22年10月の計3回、コロナが子どもに与えた影響を調べました。

3回の調査では、全国の小学生5年、高校1年の延べ1万6800人に回答を依頼。有効回答率はそれぞれ5割ほどでした。

抑うつ傾向を調べるため、同センターは思春期の子どもを対象とする国際的

な指標を採用。「気分が落ち込む」「物事に対してほとんど興味が無い」など9項目について質問しました。

中等度以上の抑うつ傾向を示した割合



(注)「全体」は小5、中2も含む。国立成育医療研究センターの全国調査を基に作成

21年は11%、22年は13%となりました。一方、子どもの保護者では改善傾向が見られました。

同センター研究所の森崎菜穂部長は「感染拡大から時間がたち、おとなは不安や心配といった心の負担がコロナ前に戻りやすいかもしれないが、子どもは時間がかかる」と指摘。「そもそも子どもは抑うつに自分では気が付かない。感染症法上の位置付けが5類に引き下げられた後も、周囲のおとなは子どもに引き続き寄り添い、腹痛や頭痛、怒りっぽくなるなどの異変があったら声を掛けてほしい」と話しています。

3回の調査にすべて参加したのは小学5年と中学2年の2学年。小学5年で

2学年を含む全体を見ると、20年が6%でしたが、